
夜の犯行

夏村涼々月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の犯行

【コード】

N5981B

【作者名】

夏村涼々月

【あらすじ】

真夏の夜のことだった。僕は、天井から自分の体を見ていた。そして……。

気づいたら僕は殺されていた。

必死にダイイングメッセージを残そうと指を動かすが、不自然に重たく動かない。

「ちつくしよ……う」

痛みが走りうめき声あげる。

自分、死ぬのか？

「あぁっ……！」

声をあげてみるのも、余計に痛みが増すばかり。

目が・・・体が・・・重い

自分の意思に反してまぶたが閉じていった。

目を開けるといつもの見慣れた部屋だった。

「あれ・・・？」

体を起こすと、時計は3時を指していた。外は真っ暗。ということはまだ深夜なのであろう。

「夢か・・・？」

夢にしてはあまりにもリアルすぎる。

でも、こうして自分の部屋にいるという事は夢だった、と思っ
かない。

自分にそう言い聞かせると、また眠りにつくためにベッドにもぐり
こんだ。

ぬるり

足を動かしたとたんに、何か液体のような変な感触が伝わった。

すごい寝汗・・・

気持ち悪いが、仕方なく、そのままほうっておくことにした。

布団にもぐりこむと、やはり「ぬるぬる」と濡れていて気持ち悪い。

「何なんだよ・・・一体」

布団をはぐと、足もとは真っ赤に染まっていた。

「血？何で・・・血が？」

ぼんやりする頭で必死に考えたが、眠気が勝ってしまい、そのままベッドに倒れこむようにして眠った。

視界がせまくなっていくなかで、最期に見たものは、不気味な笑みを浮かべている女だった。

(後書き)

「夢落ち」になって、それが正夢になった。ありがちな話ですよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5981b/>

夜の犯行

2010年10月22日13時43分発行